

[特別講演]

【夢の実現】 オリンピック、苦難と栄光、そしてこれから

女子ソフトボール 元日本代表選手
女子ソフトボール 元日本代表監督
世界ソフトボール連盟 理事
NPO法人ソフトボール・ドリーム 理事長
宇津木 妙子



3人の兄と2歳上の姉に負けたくない、厳しかった母に認めてほしいと始めたソフトボール。

県大会優勝を目指した中学時代。チームの和を学んだ高校時代。

同じ会社の中でも花形競技との大きな格差を感じ、バレーボールのよう

にソフトボールをメジャーしたい、会社に認めてほしいとチーム改革に取り組んだユニチカ垂井の選手時代。

3年で結果を残せなければさっぱりと辞めることを約束し、父に就任を認めてもらいスタートした日立高崎監督時代。相手は強い、負けて当たり前と戦う前から決めつけていたチームの悪いムードを、「強くて愛されるチーム」をスローガンに、従業員や寮母さんが同情するほどの猛練習をし、選手の挨拶や日常生活まで気を配り、意識改革を行った監督1年目。相手も同世代の女子、これだけ練習してきたのだから勝てる「努力は裏切らない」と自信を持たせ、当時3部のチームを3年後には日本リーグ1部に昇格させ、1部1年目は2位、翌年就任5年目1990年には悲願の1部リーグ優勝を果たした。

1997年には日本リーグ、群馬県代表として出場した国民体育大会、全日本総合選手権と優勝し、国内三冠を達成。これらの活躍が評価され、1997年代表監督に就任した。48人集まった候補選手から、合宿を経て30名を選び、面談や日常生活態度や海外での順応性を見ながら約1年かけて21人に絞る。「1億円もらっても二度と参加したくない」と振り返るほどの過酷な台湾合宿を乗り切り、苦楽を共にし私の練習に喰らいついてきてくれた選手21人を、最終15名に絞らなくてはいけない選考が、代表監督として一番つらい作業だった。

選考に残った15名も各所属チームでは、スター選手として活躍してきた者ばかりだが、代表チームの中では役割も違う。それぞれの個性を活かし、各自の役割をきちんと与え、夢の舞台を諦めることになった33名の選手の

思いも忘れることのないようにと、小さなミス、生活の乱れも厳しく叱り、チーム全体を引き締めた。

2000年シドニー五輪で銀メダル、2004年アテネ五輪で銅メダル。それまで決してメジャースポーツとは言えなかったソフトボールが少しずつ注目を集め出してきた時に訪れた、2012年ロンドン五輪から種目除外という試練。強化費の大幅な削減、また現役選手は目標を失いかねず、ソフトボール選手を目指す子供たちの数が減ってしまうことへの危惧。そんな中、オリンピック種目復帰の為に何としても取らなくてはならなかった、日本代表チームの2008年北京五輪での金メダル。優勝の喜びとともに、心の奥には悔しさと嫉妬を強く感じずにはいられなかった。

オリンピック復帰の為に、ソフトボールの盛んな国と、そうでない国との「温度差」をなくすこと、知名度の低いヨーロッパやアフリカ大陸に何度も足を運び、自らノックを打って楽しさを伝えたいと、2011年NPOソフトボール・ドリームを設立。各国の選手、関係者の方々の力が集まり、叶えられた2020年東京五輪限定のソフトボール競技復帰。でもここで終わりではない。ソフトボールが五輪種目として続くかどうかは、東京五輪の成功次第。日本代表選手にはレベルの高い一打一球、ひたむきにボールを追いかける姿で子供たちのお手本になってほしい。参加した各国の選手で、白熱した試合、プレーを世界中に発信してほしい。「ソフトボールを見てみたい・プレーしたい」という子供たちをひとりでも多く増やしてほしい。そしてその子供たちの輝ける舞台を作るのが私の仕事。それが私を育ててくれたソフトボールへの恩返しと、身を引き締めて私の出来る活動を続けていきたいと思います。

